

發行所 會社 京城日報社
電話 編輯部 三三六六 營業部 三三六六
印刷部 三三六六 電話 三三六六

十^{じふ}九^く日^{にち}は長^{なが}官^{くわん}會^{かい}議^ぎ定^{てい}例^{れい}日^{にち}に
 るも都^{みやこ}合^{がひ}に依^より午^ご前^{ぜん}十^{じふ}時^じより總^{そう}

日露所轄領、當選する第一銀行家
 支店、肥田町、大澤氏は去る二十
 日午後、府政新選、縣選、中山
 氏が追回客に長々當選水詰報告
 しが爲り同氏も遂に承知したり▲山
 八八佐禰藏、陸軍連輸上部長、大
 松川人、大澤氏は大連支部管内を

寮した上、来月一日頃、米釜釜釜山支店
 管内を視察すべしと、**第三尋常小學校**
 過、觀戦組合にて預案と決定せし
 釜釜山公立第三尋常小學校は、意々々々
 半の夏季休暇を利用して増築する
 と決定せしが、其の増築は四教室と
 する。此の山田口元學氏、朝鮮輕便鐵道
 株式會社社長山田口元學氏は一、兩日

中に來立の當なるが同會社の各幹部に既に著任したり

統營

▲**施原水産技師** 二十五年日總督府施原技師は、調査の爲め來統郡郷に當地水産業を召集し調査を行ひたるが、同夜施原を召し集り、晩餐會に臨めり

統營營業傳習所 養蠶は二十五日

收購を終れるが現在僱習生は二十名
なり又同營業廠習所に於ては今回實
製製造を行ふことなり目下其準備
中なり ▲營業狀況 當局の營業獎勵
に依り郡内舊營業年々増加を示し
蜜の輸付と共に前途有望なり又東
龍、蛇、龍、等には山桑多く採之

に於ては、竹の生長を促すものとして、林三
稔に及ぶと云ふ本稿の春番は大體に
於て良好にして改良種收量約七千
を得たるならんと△竹林の獎勵
が漁業者の使用する竹の需要甚大な
可れも内地より移入するもの多き
を以て最も有利なる事業なれば有者
者を募り之れが栽培を爲さんと企む

つゝ、わが竹根取寄等は都廳に於て日
下照會中の由、▲俳句會 廿四日統
俳句會の閉會、週年にて米山樓に於
て大會を催し仲々盛況なりし

人事消息

西田健輔氏(專賣課技師) 如茲併作狀况、
の授へ七月三日より東北、雲南、臺北、
内、臺灣の管 滿洲事變關係等、
池田泰治氏(土木局長技師) 如茲併作狀况、
の授へ七月三日より東北、雲南、臺北、
内、臺灣の管 滿洲事變關係等、

可し
山本徳平大佐 入京中の翌二十九日朝退京
伊藤雄二氏(貴族院議員) 入京中の翌二十
日朝退京
失敬致訪民 貴族院議員 二十八日午後入
都尾へ
内閣通達大蔵次長宛
入京京城ホテルへ
日本郵船(株)船主
一石名取の指書
二十九日朝未訪(七月
大隅商學會

[illegible]

なるときは日本の醫界に一大革進が行れる譯だ
 武井氏は當事漸く三十二歳の青年で明治四十四年大

一旦治つても治療を
と又疼痛が起つてき
極治する事は出来ぬ
に信ぜられてゐるが
就き是其が實際
に利目があ

るらしく目下
患者の一人に
に努力中であ
の研究と相俟
る俗に言ふ珠
等り幾草から
合煎じ藥して
法醫が沈んか
は病の所を治
多く使用

●護謄底金低落
米國本國護謄は戰時約五倍の暴騰を
告げ本國に入り一戻七十五六圓より
八十圓が騰せ今勢ひなりしが本品が
斯くも破綻の危険を告ぐるに至りし
原因は本國高麗貨の暴騰並他の輸入
品暴騰の故なり

▲正米 價目
復の損益なら
唯に至らず分
て在庫品のみ
在る所とせし
一層強硬の勢

[illegible]

以外
 以つて
 かなる
 納付に
 並する
 の事件
 昨今は親より姉妹が一層不睦を示
 す事となつたのであるが増賀といふ
 事は一寸實現せぬかも知れぬけれど
 も姉妹の抱込みを隠す事といふ事は
 當事者も格別には異議なく唯だ其の
 最低

石曉寶號不動產所有者孫徐完相
府衙代辦人謝金壹百拾圓也
拾六坪
此建坪參
右附屬木
最低價貳
司部同前

每平家建壹棟(四)
拾參坪八勺
造洋厝每平家建壹棟(五)
拾五坪七合四勺
價額金貳百七拾五圓五拾錢

三橋榮太郎
平野石造



愈々景品附賣出ノ切迫る

景品總額七千八拾壹圓餘也

サクレビール

御得意様の御便宜上一本以上御買
上の方でも景品券が貰へます

日清公使は豫て歸朝を願ひ、山中の處
二十八日許可の電報到着せるに付七
又激烈にして政府は之を承

大なるは和盛公司の關係せる受
の商租地と大興合名會社の商租

品は二十五萬零六百九十二圓つた
にして前年に對比すれば二がさ

に得た經驗と智識の等なり其來世
の彼は人を知る如く於て開悟の機

松京城に二尾を持参して酒々講釋
井源協同切つて焼く食はせたので

京師古野町一丁目百廿七番地
古本高麗買入弊掌の勉強是非御
試資を乞御報即刻参上▲京城本町
道活二七八一冊
書肆 罪書堂

電話一四二四番



「獨逸は豪い。我輩は獨逸に行つた意々益々獨逸の豪い事を強く感じて來た。」と某將軍は腹の底力を出して、庭園の樹草はありんこ力を吐き出して綠然はん汗りにいた六月の午後である。

以上ではないかと思つてはゐたものの、
 年々滞在し各方面から書籍
 國邊君のものを研究し玩味し
 心を益々獨逸に傾け、事を感
 ずるに國將に歸朝するを、二十時
 國の將來、國民の覺悟など、一
 へ、就て深く考へせらるゝ
 二つてゐた。
 獨逸には大相現に倣に匹敵し
 獨逸の云ふものがある。然
 獨逸と稱すべきものは或は大
 以上ではないかと思はれる
 獨逸は我が大相現と同様
 獨逸なものに更に宗教が加は

袁氏葬儀

式は支那外國折衷
 支那禮儀(舊禮)に向ふ
 北京來電に曰く 宣統
 十八日午前六時執行さるる禮儀は廣仁
 堂を發し極室に依りて晋凱門に至る
 此處にて大驛の龍套に移さるる禮儀は
 赤色の絹を以て覆ひ行列を爲し廣仁
 堂に達せり 行列は支那及び外國の
 式を折衷せしものにして一種奇異の
 觀を呈せり 禮儀は午前十時三十分を
 以て鐘聲と共に移され百餘の禮儀
 員に送られ彰徳府に向つて出發せ
 り上海特電

被告五百餘名

貸の請求事件の解決
 燕茶、尾町金港は社役金に照成候
 百四十名を相手取り貸金一千二百五十
 の請求訴訟を京成地方法院に提
 理の結果勝訴となりたるよりす
 前五百四十名は是れに服せり
 士を訴訟代理人として京成
 に控訴したるも控訴の理由
 不成立となりたるに原告側は金港
 明治四十五年五月二十八日當
 合詞調居住の本郷高が連稱し

火藥の密輸入

萬葉に關係せる内地人
 去る二十二年午後八時、青島に入
 る薩摩丸乗組給仕、三田忠治が密
 したる石油罐二個を陸揚し持ち去
 る所へ憲兵が來合せ取調べ
 せるに經九、畏知の火藥を隠しあり
 治は同艦船長、田村某に隠けけり
 依賴せられたるのみならず田村に
 事情を頼したるに同人は高島強
 亞ヘラルに非ず、中なる花火製造
 日某の依頼を受け大阪より勝人

家屋土中に埋る

去る二十三日午前十時、町奉行の儀
至北高殿、縣高殿、面會。里に由
りて、同里三條六丁曹役連、
及び次女曹安、只一丁の兩名、
し前記曹安連及び同居曹安、
妻陳姓女(一)の三名は何れも、
腰帶等に數箇所の打撲傷を負
下加療用なりと

●海賊は支那漁士

被害あり、海賊は數組に別れ、龍河宮を襲ひて僅々三箇月中に二十數件

(四)

國江附近の漁師が漁撈の暇に、海邊に
 仕て悪事を働くものゝ如し最近
 ける被害は大長山協會月口六で
 根英林(三)同會三警備子二番戸
 (公三)南沙山子一番戸千長浩(三)

●二日目の勝負

[illegible]

●大相撲と元山 關次盛

馬山親の渡船連絡
出水の爲め交通杜絶となりし馬山親の爲め、
三浪津落葉川は二十九日より、
小舟一疋、郵便物に限り、出水現
十五日間、渡船連絡を開始する。
なれど、概しては秋田運送第五
六兩列車にて、著陸時刻表上の如
く、南行列車は三時五十分、北行

三	馬	現	同
一	山	製	同
五	廣	著	同
二	後	同	五
三	三	現	三
〇	〇	出	〇
三	三	著	三
浪	浪	同	浪
後	後	同	後

●**畑中で慘殺** 平南孟山
徳面金岩洞村(平南)は去る四
外三名と共に盤龍所在の畑中に
其處に居る中同者にか欲面照

△木の芽を喰つて生

郡地方は貧民が多く隨つて一般に
 活の程度が低い洛川龍門の各地

同回の旅行で豊饒に感じたのは
 の變が京成附近と違つてすべて

である事であるが風俗も其他は京
 邊と違つた所が無い今回訪問し
 た地は江東成川陽龍門方面であるが

方は何れも平穩であつて住民は

農事に勤精してゐる

樹脂を焚いて光線を採るこの

巡業日記

鎮西出船蔵

雨の御星巡り
おきなな山門へ
牛久保食は、この事
初め、時、梅、花など
初め、山に、鳴り渡つた
も、照らす、舟に入つ

さは随分多いだらうと思はれま
是は決して然うでない。

かゝる座を
てゐた。
開
座なか
みなが
が矢張り
小宮様
に行つ

九州山嶺鐵道等は

何處どこへ（退ひ）
 山に掛けた。詭風きふう巡り来りて見ようぞと、城下に逆陣さかじんの初を計つたが、賊は越前えちぜんのと見えて、前部の玉突たまつきに女ども岩窟がんくつの

其附近の龍澤温泉は昨今遂に多く主として無麻賣所等に於

○**讀者文藝**(一) 京東雜記
俗語云、前日(一)
○財や銀より錢返りも替かた
海濱の波性(二)
▲東京品評会ニ七 大島
▲紫雲の船に暇ひ浪を留めしとき 大島
▲波はなりゆく教ふ事あるもて 大島
▲惜しいといふ(浴衣のもの)につれ 大島
京東

狂歌 <small>ナリツキ</small>	同	四日	同
次開俗謡 <small>ナリツキ</small>	同	五日	同
蘭募集規程	△川紙は端片又は同		

[illegible]

五目ならに延
 玄關の隅の方に大
 銘酒

見ると彼の怪物は
 二三四捕へて糸
 十一か十二の子供の
 につてゐた。次は大門
 明りに行つたが

[illegible]

